

APPRA 大会に参加して(2001～2013 年)

山根和代 (立命館大学)

2013 年 11 月 12 日から 14 日まで、タイのバンコクでアジア太平洋平和研究学会 (APPRA) 大会が開催されました。これまで 2001 年フィリピン、2006 年インド、2009 年台湾、2011 年立命館大学で開催された大会に参加しましたが、簡単にこれまで参加した大会について振り返り、今回の大会について印象に残ったことについて執筆してみたいと思います。なお以前参加した APPRA 大会については、高知市で発行されている『雲母』という女性誌に執筆してきました。それをもとに今回以前の APPRA 大会を振り返ってみたいと思います。

1. 2001 年フィリピンのタガイタイにおける APPRA 大会

2001 年の 12 月 8 日から 10 日まで、フィリピンのタガイタイ市(Tagaytay)で APPRA の会議が開催されました。会議場はカトリック教会の建物で、貧困のために売春をせざるを得なかった恵まれない女性を更生させる所でした。マニラ市のごみごみした所とは異なり、湖が見えるメアリリッジという緑の豊かな所がありました。テーマは、「アジアと太平洋における平和理論と実践の再構築」でした。大会は Mary Soledad L. Perpunan さんによって組織されましたが、彼女は IPRA Commission for Women and Peace (now Gender and Peace)の創設者の一人でした。またクインズランド工科大学の John Synott 教授は Commission for the Rights of Indigenous People の創設者の一人でしたが、彼もフィリピンでの APPRA 大会の組織に貢献されました。フィリピンの Mary さんは女性として初めて APPRA の事務局長に 1998 年に選出されました。彼女は Third World Movement Against the Exploitation of Women やフィリピンの NGO の協力を得て、見事に大会を成功させました。しかし残念ながら 2011 年には亡くなられました。

フィリピンでの APPRA 大会では、白人は少数でした。カナダの大学院生、オランダの女性教師、カナダのクウェーカー教徒夫妻、フィジー在住のカトリック神父など白人の参加者はいましたが、参加者のほとんどが黄色人種でした。カナダの若い女性は、「少数派である体験は、貴重だと思う」と述べていました。韓国、タイ、台湾の女性は、日本人とよく似ていて、知り合う前から親近感を感じたので不思議でした。またインドとパキスタンの研究者同士は、すぐ友達になっていました。国同士はカシミールをめぐる対立していても、個人のレベルでは仲良くなれるところが、このような会議の好いところでしょう。

会場では机を丸く並べ、自己紹介から始まりました。日本の参加者は、国際平和研究学会事務局長の児玉克哉氏 (三重大学) と沖縄キリスト教短大元学長の原喜美氏、カトリック修道女の方と私の四人でした。原先生は 85 歳で出席され、参加者は大いに励まされました。娘さんがいらっしゃるオーストラリアで大腿骨の骨折をされたのですが、そこでは寝たきりにならないようにリハビリに力を入れるとのことでした。日本の病院では、看護婦不足で寝たきりにされがちなので、その相違に驚いてしまいました。原先生は杖をついていらっしゃいましたが、日本の憲法九条が気になって会議に参加することにしたそうです。

参加者が所属する国は、韓国、台湾、カンボジア、マレーシア、タイ、ミャンマー、フィリピン、パキスタン、インド、フィジー、オーストラリア、イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、オランダと様々でした。しかし中国からの参加者がなくて残念でした。

会議のテーマは、「アジア・太平洋地域における平和理論・実践の構築」でしたが、発表原稿は用意していてもそれを読むと聞いている方は眠くなるので、口頭発表にしてほしいと依頼がありました。私は世界の平和博物館、日本の平和博物館、特に高知の平和資料館「草の家」の活動を中心に話をしました。平和博物館では、平和研究、平和教育、平和活動が総合的にできるのではないかと述べると、「それはいいやり方だ。手引書のような物があれば、入手したい」、「フィリピンの子供を日本の平和博物館に連れていきたいので、どんな所があるのか、教えてほしい」「日本の平和博物館が、カンボジアの平和博物館を援助することは可能か」など、様々な反応が

ありました。フィリピンでは、平和運動が盛り上がりつつも、それを記録して、次の世代に伝えていくことがあまりできていないそうです。情報を交換し合うと、お互いに学ぶことが多いと改めて思いました。またマスコミは、対立や紛争ばかり報道して、その解決のための努力をしていてもほとんど報道していないことに、改めて気付きました。

フィリピンでは、八割以上がカトリック教徒で、イスラム教徒は少数派です。南部のミンダナオでは、その対立ばかり報道されがちですが、平和への努力をしていることを知りました。貧困の問題が大きく、男性の寿命は 66 歳、女性は 54 歳という低さに驚きました。貧困をなくし、識字率を上げる取り組みの結果、対立していたカトリック教徒とイスラム教徒がお互いに尊敬しあうようになったという話を聞きました。マスコミは、対立ばかり報道しないで、もっと平和への努力を報道すべきでしょう。

南西太平洋にあるフィジーという国の参加者から、先住民フィジー人とインド系の対立、そして和解への努力をしていることを知りました。1874 年にイギリスの保護領になり、1970 年にイギリス連邦の一国として独立。人口は大体 80 万人です。1879 年から 1914 年にイギリスによってフィジーの砂糖栽培場に移されたインド系の人々は、ヒンズー教徒とイスラム教徒、フィジー人はキリスト教徒が多いそうです。人種的宗教的対立だけではなく、土地をめぐる対立が激しい中で、女性がお互いの不信感をなくすために活動しています。女性は、夫や息子の考えを変えるのに大きな力を発揮しているそうです。ある迷信がもとで男たちが対立していると、母親、祖母、伯母などが行って仲介をしたなど、興味深い話がありました。

女性は仲介者として重要な役割を果たすという話は、カナダの大学教授からも聞いたことがあります。彼はカナダの農村の家庭を訪問し、母親の果たす役割を研究されていました。父親は息子に農業の後継者になってほしいと思っても、反発したり、都会に出て行ったりして、困難な場合が多いそうです。しかし母親が父親と息子の間に入って、問題を解決することが多いそうです。家庭でも地域でも女性が果たしている役割が大きいのは、日本でも同じでしょう。しかし北欧のようにもっと国政レベル、また国際的レベルで、調停者として力を発揮することがまだまだ少ないように思われます。

ビルマからザンという女性が参加されていました。ちょうどアンサンブリー女史のノーベル平和賞受賞 10 周年を記念して、大会参加者に黄色いリボンをつけて下さいました。彼女は軍事政権が支配している「ミャンマー」より、「ビルマ」という国名を好むと述べていました。（従って、ここではビルマという国名を使用します。）1988 年軍事政権が民主勢力を弾圧した際、多くの人々がタイや中国との国境に逃亡しました。タイに逃亡中子どもは二週間食料がなく、餓死した子どもがいたそうです。また逃走中出産をした女性は、子どもに着せる服がなくて困ったことなど、話してくれました。会議に参加する費用がないので、APPRA でその費用を負担しましたが、彼女は内緒で会議に参加したそうです。本名がわかると逮捕されるかもしれないので、仮名のザン・ブルーミング・ナイトを使っていました。今のビルマは夜のように暗いので、花が咲く民主的なビルマにしたいという願いを込めたのでしょう。

タイとビルマの国境には、10 万人の難民がいて、8ヶ所に収容所があるそうです。そこにはオランダ、フランスの NGO、イギリスの BBC などから援助があるものの、医薬品をタイの役人が半分取って困ると述べていました。彼女はオランダの大学に行ったことはないのですが、通信教育を受けて学校の先生をしていました。

1996 年タイの国境付近の難民キャンプで、女子学生がビルマ女性連合を結成し、民主的なビルマの建設を目指して活動をしているそうです。平和教育をし、裁縫、絵葉書作りをしていました。ザンさんは、ビルマの織物でできたカバンとカレンダーを持ってきていました。自分が着る服は民族衣装三着だけで、カバンなど可能な限り持ってきたそうです。会議の参加者はそれらを買って資金作りに協力しましたが、それでも余ったので、私は残りを全部買って日本に持って帰ることにしました。その資金で、難民が使うせっけんや服を買うとのことでした。持ち帰ったカレンダーなどは、平和資料館「草の家」で扱ってくれました。このような第三世界の人々と協力

して活動することも、今後の課題になるでしょう。

台湾からは女子大生が参加し、実に積極的に活動しているのに感心しました。2001年9月に台湾平和財団を創り、インターネットを通して若者に働きかけているそうです。保育園における平和教育の推進、ラジオ番組で民族問題の取り組み、ゼミに外国人を招待して異文化の交流会を企画、韓国や中国の学生との交流などを行っているそうです。

女性の問題として、日本軍に性奴隷として働かされた中国人女性、家庭内暴力、10代の妊娠問題、性教育などがあります。1990年代に多くの女性団体が誕生し、台北には女性センターが10ヶ所作られたそうです。

日本に帰ると、早速女子大生のベッシーさんから電子メールで、イギリスの平和博物館について問い合わせがありました。ブラッドフォードでは平和博物館建設を目指していますが、市の中心部にある平和美術館を紹介すると、早速2月に訪問したそうです。やはり大会で情報や意見の交換をすると、活動の輪が広がることを実感しました。

印象に残った発言として、「平和を実現する活動は、花を栽培するのと同じように根気がいる。」「夜明けは必ずやってくるので、地道に活動をすることが大切である。」また韓国で平和教育を推進し、日韓の若者の交流を促進している女性研究者は、「日本人とどのように草の根レベルで交流をしていくかが、課題である」と述べていました。

会議の後、マニラにある退役軍人の建てた博物館へ行きました。第二次世界大戦中、日本軍がいかにフィリピンの人々を支配し、またフィリピンの人々がどのように抵抗をしたのかが展示してありました。刀でフィリピンの男性の首を切ろうとしている日本の兵士、女性を強姦した兵士など、目を背けたくなるような展示でした。しかし日本の歴史の教科書には、このようなことは書かれていません。日本とフィリピンの若者が会おうと、歴史認識が異なるので、相互理解が困難なことがあることが考えられます。今後、日本の歴史教科書の内容を充実させること、またフィリピンと日本の若者の交流が大切であることなど、考えさせられることが多い訪問でした。

なお2003年8月21-24日にはカンボジアでAPPRA大会が開催され、テーマは”Visioning Alternatives to Violence”でした。私はHague Appeal for Peaceの取り組みの一環として平和教育を推進するためにカンボジアへ行き、このAPPRA大会には参加できませんでした。

2. 2006年インドのジャイプールにおけるAPPRA大会

2006年1月5日から7日までインドのジャイプールにあるラジャスタン大学で、APPRA大会が開催されました。テーマは、「第二次世界大戦後60年：平和構築の教訓」でした。1月5日には開会式があり、そこにはガンジーの写真がありました。ガンジーはインドだけでなく国際的に重要な人物ですが、肝心のインドで彼の重要性が忘れられかけていたそうです。アメリカの公民権運動の指導者であったマルチン・ルーサー・キング牧師や、南アフリカ大統領になったネルソン・マンデラ氏などに大きな影響を与えましたが、現在でも国際的に大きな影響を与えています。そのような海外の動きを知って、インドで改めてガンジーの偉大さを再認識するようになったという話があって、驚きました。午後から会議が開催され、ドイツのカルステン・ギーゼ博士の報告がありました。インドとパキスタンの対立関係を改善するために、まずは共同で経済的なプロジェクトに取り組んだらどうかという提案がありました。また反戦だけでなく環境保護を重視する必要性を主張したフランス・ヴェルバーゲン教授の報告などがありました。

その後絨毯を織る所へ、連れて行かれました。商売上手で、巧みに絨毯やマフラーなどを売ろうとしていました。夕方山頂にある古い要塞まで行き、そこで夕食を食べることになりました。星空の下で夕食にすると言われ、まさかと思いました。真冬にコートを着て夜空の下で香辛料のきいた食事をしながら、ボスニアからオーストラリアへ移住した女性と話をしました。当時博士論文を執筆していましたが、平和の理論だけでは不十分で、実践が重要ではないかなどと話しました。翌日の朝食後会議の参加者は、バスでジャイプールの街を観光する機会

がありました。宮殿博物館へ行きましたが、その一部には武器の展示があり、まるで戦争博物館のようでした。またジャンタル・マンタル(天文台)があり、観測儀がいろいろありました。1728年に作られたそうですが、世界最大の日時計が印象的でした。

「ジェンダーと戦争」に関するテーマの会議では、平和博物館について発表をしました。大阪国際平和センター、平和資料館「草の家」などを例に、平和教育と和解の活動に取り組んでいる平和博物館について発表をしました。小泉首相の靖国神社参拝や教科書問題に関する報道が多い中、「日本の市民の地道な平和活動の報告は良かった」という反応がありました。フィリピンのソウル・パーピノン女史は、売春をさせられていた女性を救う活動を25年前に始め、その女性たちが暮らすことができる所を5ヶ所設立したこと、日本人などの男性がセックスツアーをしている問題、フィリピンだけでなく世界各国の米軍基地の周辺で女性が売春をさせられている問題とその対策などを報告をされました。

インド出身のある女性は、カナダに37年間住んだ後、60歳になってスリランカにおける非暴力平和隊で活動をされていました。2003年から活動を始め、地域で暴力が行使されないように監視し、安心して暮らせる地域社会の構築に貢献をしていました。彼女たちが存在するだけで、警察が乱暴に市民を扱うことをしなかったという報告でした。まさにガンジーの非暴力の実践をしているのだと思いました。

またアフガニスタンの女性に関する報告があり、以前女性をこっそりと教育しなければならなかったこと、現在でも女性が苦しんでいるだけでなく、子どもが誘拐されて西洋へ連れて行かれ、安心して暮らせないという報告があつて驚きました。アフガニスタンでは暮らすことができないのか、その女性研究者はアメリカの大学で教えているとのことでした。

夜は会議の参加者とインドの踊りを見る機会がありました。音楽も楽しく、最後には誘われて舞台上上がっていっしょにダンスをすることになりました。

7日の会議で一番心に残ったのは、哲学者のダグラス・アレン博士の講演で、「私たちには自分たちが思っている以上の力があることを知る必要がある」ということでした。確かに無気力になるのは容易ですが、そうなれば支配者が喜ぶことでしょう。彼は哲学者ですが、地域の人々と共に平和の問題に取り組んでおられ、親しみを感じました。例えば毎年8月6日には、シャドウプロジェクトと言って、人間が地面に横たわり、それをチョークでなぞっていく取り組みだそうですが、人々に与える影響が大きいそうです。

ニューデリーでは国立ガンジー博物館へ行きました。ガンジーがインドの独立のために暴力を使わないで闘った様子を学ぶことができるように展示していました。暗殺された時に着ていた服は血に染まり、銃弾も展示してありました。彼がどれだけ民衆に慕われていたかが、暗殺後の葬儀の写真で伝わってきました。アメリカのブッシュ大統領のように武力を行使しないで、また質素な生活をしながら、民衆と共にインドの独立のために闘った生き方から、多くのことを学ぶことができると思いました。また彼が暗殺をされた場所にあるガンディ・スミムリティ博物館も、訪問しました。子どもでも理解できるように、人形を使ってガンジーの生き方を示していました。

一緒に行った高校生の息子の希望で、国立自然史博物館も訪問しました。環境・森林省の下で環境保護をテーマに、子どもにもわかりやすく展示していました。4階まで展示がなされていましたが、工場から出る煤煙で空気が汚染されている問題、またヨーロッパでトラの毛皮や蛇の皮をファッションに使うために動物が絶滅の危機に瀕している問題、たばこを吸うと健康に悪いこと、環境に優しいエネルギーについて解説した展示など、どんな環境問題があるのか、また動物や人間の生命、共生について考えさせられました。子どもや大人の環境教育に、とても良い博物館であると思いました。

3. 2009年台湾における APPRA 大会

2009年9月10日から12日までに台湾の花蓮における国立東華大学で、APPRA大会が開催されました。大会はその大学の Cheng Feng Shih 教授と APPRA 事務局長のジョン・シノット教授

により、組織されました。テーマは、「アジア・太平洋における平和研究と教育：革新と変革」で、65名が参加し48の報告がありました。サブテーマは、「持続性、平和文化の構築、ガバナンスと政府の課題」でした。私は作家の早乙女勝元氏たちとイギリスへ旅をする予定があり、APPRO 大会は途中までしか参加できませんでしたが、途中まで参加して印象に残ったことを報告します。

村上春宿というホテルでのレセプションでは、先住民の音楽を三人の若者がギター、ドラム、マラカスを演奏しながら歌っていました。台湾の先住民が、アメリカ先住民やアイヌの人々と似ているのに驚きました。会場の国立東華大学では台湾の先住民を研究していますが、大会の朝豊作を祝う踊りを見る機会がありました。そして大会では台湾やアジア・太平洋地域における先住民の文化的政治的権利を求める取り組みに関する報告がありました。午前中本会議があり、午後私は岡まさはる記念長崎平和資料館と東京にある「わたちの戦争・平和資料館」における平和と和解の努力について研究発表をしました。

タイのタマサト大学平和情報センター所長のチャイワット・アナンド教授により、紛争解決における対話について研究発表がありました。タイでは2004年から仏教徒とイスラム教徒の間の対立のために3000人以上の人々が亡くなったそうです。彼の報告で感動的だったのは、アメリカの大学生がピザの配達中14歳の少年に殺されたが、大学生の父親は恨みを乗り越えてその少年の保護者であった祖父と共に、アメリカから暴力をなくすための活動を始めるためにタリク・カミサ財団を作ったという話です。相手を許すことで、暴力の連鎖を断ち切った例として話されました。

事件は1995年1月21日、カリフォルニアのサンディエゴで起こりました。サンディエゴ大学の20歳の学生であったタリク・カミサさんがピザを配達中、18歳の暴力団リーダーの命令に従ったトニー・ヒックス（当時14歳の少年）に銃で殺されました。息子を殺されたアジムさんは、悲しみを乗り越えるために数日間山で過ごし、どうしたら良いのかを考えました。彼は恨みを抱いて復讐するのではなく、絶望と悲しみを乗り越え、息子の死を無駄にしない生き方を求めました。子どもが子どもを殺すような社会を、変革することを考えたのです。彼は殺人者の保護者である祖父のプレス・フェリックス氏も銃社会の犠牲者であると考え、1995年にタリク・カミサ財団を設立することにしました。多くの友人がその考えを支持してくれることになりました。1995年10月26日アジムさんは自宅に息子を殺した少年の保護者で祖父のプレス・フェリックス氏を招待し、約50人が集まりました。大事な息子と孫を失った二人は抱き合って和解し、タリク・カミサ財団を通して暴力撲滅のために活動を始めました。二人で何万人もの子ども達に、暴力の悪循環を断ち切るために講演活動を始めました。殺人を犯したトニー・ヒックスは1996年に有罪となり、25年間監獄で生活することになって現在も服役中です。彼は2027年に仮出所を許されることになっています。この事件とタリク・カミサ財団についてはウェブサイトを通して、世界中の人々が知ることができるようにしているそうです。

9月11日私は本会議で司会をしましたが、2001年アメリカで起こったテロ同時多発事件の犠牲者に参加者全員で黙祷を捧げました。本会議におけるインドのクマール・ラヴィンドラ博士の講演では、不正なことに対して非暴力の立場で協力をしないことによって、紛争の解決をすることが重要であるという内容でした。ガンジーの非暴力主義に関する報告でしたが、日本国憲法第9条の戦争放棄、戦力不保持の思想と共通しているのではないかと考えさせられました。

その他興味深い研究発表が色々ありました。太平洋にあるバヌアツ共和国という国の開発における問題点を指摘した発表。またビルマとタイの国境にいるカレン族は、「籠の中の鳥」と同じような状況に置かれているという発表がありました。スリランカにおいては軍事的対立があって漁ができないなどの問題があります。ノルウェーが仲介しようとしたのですが、スリランカの人々は疑問を抱いているそうです。EUの援助は紐付きだが、日本の援助は紐付きではないので歓迎されているそうです。その背景には東京裁判において、スリランカが日本を許す態度を取ったことが関係しているという指摘がありました。

フィリピンのミンダナオでは携帯電話、テレビ、ラジオ、パソコン、新聞など持っている人とそうでない人のギャップがあって、暴力事件に対して情報を持っていない人は、うまく対応できないという研究発表がありました。

台湾に住んでいるイギリス人研究者のエドモンドさんの報告では、人間が欲望を減らすこと、あるがままの自分を受け入れること、心の平和が必要であると述べていました。心の平和を実現するには、独りになって自分と向き合うことが必要であるとも指摘されていました。大量消費社会における人間の生き方を批判した内容でしたが、他の研究発表と異なって興味深い内容でした。

またタイの平和学について研究発表がありました。タイの人々は過去のことは忘れようという傾向があるそうです。平和というのは静かに秩序を守ることであり、人と違う意見があってもそれを表現しないことが求められているそうです。「対立や意見の相違が存在するのは、当然のことである」と考えるのではなく、「対立は避けるべきである」と考えられているそうです。従って人権問題があっても、個人の問題として考えてしまいがちであるそうです。日本との共通点があり、興味深く思いました。

なおこの大会の報告がオーストラリアで発行されている *Social Alternatives (Peace-building from Below in Asia-Pacific)* というテーマ) で出版されました。(Vol 29, No 1, 2010)

4. 2011年立命館大学における APPRA 大会

2010年にシドニー大学で開催された IPRA 大会で、事務局長がクインズランド工科大学のジョン・シノット教授から立命館大学の君島東彦教授に変わりました。そして2011年10月14-16日に立命館大学で APPRA 大会が開催されました。テーマは、「アジア・太平洋における平和研究の新しいアジェンダ」でした。100人以上が国内外から参加し、78の報告がありました。ちょうど東日本大震災や原発事故があったので開催について不安がありましたが、君島教授を中心とした大会主催者のおかげで大会に多くの参加者があり成功しました。

安齋育郎名誉教授から「3.11後の平和研究のアジェンダ」という基調講演がありました。この講演は大変好評で、コスタリカにある国連平和大学の学術誌 *Peace & Conflict Review* でも紹介されました。さらに原子力の未来に関する特別なセッションがありました。

様々なセッションでは平和研究における課題が幅広く取り上げられました。例えば、芸術と平和、平和教育、平和博物館、東アジアの平和、平和運動、災害の取り組み、人権、ネパールなどです。またレセプションや文化的行事もありました。

なお大会での報告は、*NEW PARADIGMS OF PEACE RESEARCH: The Asia-Pacific Context (by Akihiko Kimijima and Vidya Jain (Eds) Jaipur, India: Rawat publications 2012)* という本として出版されました。なお日本平和学会の多くの会員が参加しましたので、詳細は省きたいと思います。

5. タイのバンコクにおける APPRA 大会

大会のテーマは、*Engaging Deadly Conflicts in Asia Pacific with Non-Violent Alternatives* でした。全体会以外に様々なセッションが同時に開かれたので、自分が参加し印象的であった報告について述べてみます。今回のテーマに関連して、私は「沖縄のガンジー」と言われている故阿波根 昌鴻(あはごん しょうこう 1901年3月3日 - 2002年3月21日)氏が創設された平和資料館「ヌチドウ宝の家」について報告しました。沖縄戦、米軍基地建設への非暴力の反対闘争、平和資料館での平和教育について話すと、インドの *Rev. C. P. Auto* という若い研究者に話しかけられました。彼は *Bishop's House* という団体の代表をしています。現在大学院で平和学の開設をしたいが、平和博物館における平和教育について集中講義をしてほしいとのことでした。インドの東にナガラランドという州があり、ミャンマーと国境を接しています。インドのひとつの州ではなく、パキスタンやバングラデッシュのように独立したいので、若者の教育に力を入れているそうです。そこで平和博物館について集中講義をしてほしいとのことでした。ただし予算がないので宿泊所のみ提供するとのことでした。インターネットでナガラランドについて調べてみますと、美しい山岳

地帯のようです。このようなおもしろい出会いもありました。

大会では平和教育に関する分科会で司会を2回担当しました。インドの **Martin Luther Christian University** の **Leban Serto** 氏は、ドイツの平和団体の援助を受けて、平和構築のために活動している人々を探してインタビューをし、それを展示して若者の平和教育をしています。私は現在立命館大学の国際平和ミュージアムで副館長として平和教育に関わっています。年間約5万人の訪問者のうち、小学生、中学生、高校生が約半数です。ただ展示を見て終わるのではなく、それがきっかけとなって自分も平和のために何かしてみようと考え行動の一步を踏み出すことが重要であると考えています。それを平和ミュージアムでは、「見て感じて考えて、その一步を踏み出そう」と表現しています。平和構築のために活動している人々の展示は、見ていると励まされますので、今後平和博物館で展示をしていくと良いのではないかと思います。

非暴力主義のガンジーやキング牧師など世界で有名な人々がいますし、その他ノーベル平和賞の受賞者の展示をしている平和博物館は、世界であちこちにあります。例えばイギリスのブラッドフォード平和博物館、ドイツのレマーゲン平和博物館、フランスのカーン記念館などです。しかしもっと身近に平和の実現のために活動している人々について発掘、記録、展示していくと、より効果的でしょう。今回は分科会でポスターを張って、様々な人々を紹介していました。例えば、タイのゴソム・アルヤ(**Gothom Arya**)氏は、バンコクから南部のパッタニまで1000km以上平和行進をして、政府軍とタイ南部のイスラム教徒分離派組織の対立問題に取り組んでいます。またタイにおける王政支持派と民主主義を求める人々の和解を求めて、対話の場を提供しています。

最後の全体会で自由に発言する機会があり、2014年9月に韓国のノグンリ記念館で第8回平和博物館国際会議の開催予定について紹介したところ、参加したいという人々から声をかけられました。APPRA 大会では旧友との再会だけでなく、新たな友人ができ、それがきっかけで情報交換やその後の交流が発展していくのが、大きな魅力であると思います。まだ APPRA の大会に参加したことのない方は、今後参加することをお勧めします。

今回は発表報告を CD に入れて下さったので、スーツケースが軽くてすみました。全体として ASEAN の重要性について考えさせられ、東アジアにおける平和の構築に生かすことができないかと考えさせられました。

国際会議に参加すると、いつも最大の成果は友達ができることです。これまで知らなかったことを学び、またこちらも情報を発信して交流すると、文化は異なっても相互理解は可能です。その中で信頼関係ができ、連帯ができるようになります。特に女性同士は、とても親しくなれます。仕事、家事、子育て、平和の活動など、国は異なっても共通したことが多いからです。母親は子ども達の未来を真剣に考え、様々な困難があっても、粘り強く活動しています。「母は強し」と言いますが、どの国の母親も同じのようです。様々な紛争や対立が存在していますが、女性は仲介をするなど紛争の平和的な解決に大きな役割を果たすことができることを、改めて考えさせられました。今回はパキスタンの **Paiman Alumni Trust** の **Mossarat Qadeem** さんが、イスラム教過激派の若者へ母親たちが働きかけることによって民族的対立を解決しようとしているという興味深い報告がありました。日本には母親運動が存在することを知らせると、大変関心を示され、早速以前執筆した原稿を送った次第です。

最後になりましたが、APPRA 事務局長をされている立命館大学国際関係学部の君島東彦教授、そして2012年から君島教授と共に事務局長になられたインドの **Vidya Jain** 教授、そしてタイのタマサト大学の **Chaiwat Satha-Anand** 教授と **Janjira Sombatpoonsiri** 教授に対して、素晴らしい大会を組織されたことに感謝の意を表したいと思います。